発掘調査の概要

藤原宮外周帯の調査（飛鳥藤原第191次）

2017年１月から２月まで、水路改修にともなって全長137mもの細長い調査区を設定し、発掘調査を実施しました。調査地は、南面大垣外濠と六条大路の間にある外周帯と呼ばれる空閑地にあたります。

調査区は水路による削平が著しく、残念ながら古代の遺構面が残存しない部分がほとんどでした。かろうじて調査区西部で、古代の東西溝を２条検出しました。２つの溝は重複しており、下層の溝は、幅１m程度の流路と考えられます。埋土からは、藤原宮造営期の土器や藤原宮の瓦が多く出土しました。上層の溝は、南肩を検出し、幅1.2m以上、深さ20㎝で、溝は東に向かって北に振れ、調査区中央よりやや西で調査区外となります。上層の溝は、南面大垣外濠と位置が合致することから、外濠か外濠埋め立て後の落ち込み等の可能性も考えられます。

宮造営前の遺構としては、調査区東部で検出した古墳時代の土坑から、吉備型甕と呼ばれる特徴的な甕が出土しました。そのほか、４条検出した自然流路のうち、３条が旧地形に沿って斜行していました。

本調査は、遺構の残存状態は良好ではありませんでしたが、水路の削平を免れた遺構から、藤原宮南辺の様相の一端を知ることができました。また古墳時代以前の旧地形や土地利用を考えるうえでも参考になる成果を得られたと考えています。

（都城発掘調査部　石田 由紀子）

調査区西半全景（西から）

山田寺の調査（飛鳥藤原第189-11次）

山田寺は、蘇我倉山田石川麻呂の発願により建立された古代寺院です。７世紀の中頃に造営が始まりますが、石川麻呂の死により一時期造営が中断し、最終的に天武天皇14年（685）に完成にいたったと考えられています。

本調査は、史跡地北端の法面改修工事にともなうもので、北面大垣（寺域北側を囲う塀）の柱穴列の検出が予想されました。調査の結果、想定通りの位置で大垣の柱穴列を３間分検出しました。柱穴は大きなもので一辺２m前後、深さ0.9m以上です。長大な柱を立て並べて高い塀が築かれていたことがうかがえます。また一部の柱穴には、古い柱を抜き取って新しい柱に改修した痕跡もみつかりました。同様の痕跡は以前の調査でも発見されており、天武朝の寺全域の完成にあわせ、古くなった当初の柱を抜いて改修されたものと考えられています。本調査からも、この所見を追認することができました。

また、調査区北側では、予想に反して、瓦を組んで構築した暗渠が４条もみつかりました。暗渠は柱穴を壊して築かれており、大垣が廃絶した後に、寺域内の排水を目的として設置されたようです。これまでの調査では、東面の大垣は10世紀前半に倒壊し、築地塀に改作されたことがあきらかとなっています。今回検出の暗渠も、あるいはこうした塀の改作にともなって設置されたものかもしれません。

今回は21㎡の限られた範囲の調査でしたが、調査区内に所狭しと遺構が現れ、予想以上の大きな成果が得られました。「飛鳥は何が出てくるかわからない」との声をしばしば耳にしますが、こうした小規模な調査であっても、おろそかにできないことを改めて実感しました。　（都城発掘調査部　廣瀬 覚）

調査区全景（北西から）